

## 最終レポート 「感謝」

海外に全く興味のなかった私。過去の自分を思うと、今の自分が本当に不思議に思えます。転機は、大学に入学して1年が経った春休みでした。大学の先輩に勧められ、貧困や戦争、宗教等を学ぶ、NPO主催のマレーシア・スタディーツアーに参加しました。異国に身を置き、その文化に触れ、人々と交流することの「面白さ」に衝撃を受けました。その1年後にはインドに1ヶ月以上滞在し、英語研修や旅行、企業訪問等を行いました。私はますます海外に魅かれていきました。海外滞在を通じて、文化や人々との違いを感じるとともに、多くの共通点にも気づかされます。私は新しいことに気付き、学ぶことが好きです。またこうして自分を成長させられるとも信じています。それ故、今回の留学もこうした自己成長の過程の延長線上に位置付けていました。無論、英語の上達も留学の目的の一つではありました。しかしそれ以上に、異国の地で様々な経験を積むことで、「心身ともにタフで、豊かな世界観を持った人」に成長したいと考えたのです。通常の留学では、英語の勉強や学問の追究が主な目的になると思います。しかし、この埼玉県のプログラムでは、県の親善大使として派遣されるため、勉強に加え、普通は経験できないようなことを経験でき、さらに自分を磨けると考えました。そして、自分の成長や努力が、結果として、埼玉県やオハイオ州にプラスの影響を与えられれば最高だと思いました。奨学金をいただいて、貴重な経験を得られたことに感謝の気持ちでいっぱいです。最終レポートでは、私がこの留学で何をして、何を得て、学び、今後この経験をどう活かしたいかをお伝えします。

まず、留學生活の基本となったのは授業です。私は学部生として入学したので、基本的には現地のアメリカ人と一緒に授業を受けていました。日本の大学でも専攻している政治学に加え、ビジネス、マーケティング、コミュニケーション等を履修しました。また一部、留学生用の授業もありました。入学直後は、ほとんど授業についていくことができませんでした。特に印象的なのは、秋学期に履修したアメリカ政治の授業です。非常に明るくて楽しい先生でしたが、早口でトーンも激しく変わり、英語を理解するのが難しく、加えてジョークの多い方でした。当時、何が冗談で、何が大事なことなのか聞き分けることができず、散々集中して聞いた挙句に「just kidding!(ほんの冗談だよ!)」と言われ、気が抜けることが多かったです。だいぶ苦勞もしましたが、今となっては良い思い出です。

また唯一秋・春両学期に渡り授業でお世話になった先生がいます。秋学期にはスピーチ、春学期には intercultural communication(異文化間で行われるコ

コミュニケーション)の授業を履修しました。特に後者は、日本での授業も含め、これまで受けてきた全ての授業の中で最も面白いと感じた授業でした。アメリカ人の先生と学生、中国人学生、私の4人で行うディスカッションを中心とした授業でした。話題がアメリカと中国に関する場合は、まさにその文化を「行っている」人からの意見を聞け、また日本に関しては私が伝えることができます。単に本を読んで異文化について学ぶのとは全く異なる世界だったと思います。授業の一環で先生の友人であるネイティブ・アメリカンのご夫妻を訪ねられたことも本当に貴重な経験です。学生はもちろん、先生とも家族のように仲を深めることができ、アメリカに第二のホームができたように感じます。

この授業で学んだ最も印象深いことは”Communication begins from perception (コミュニケーションは認知から始まる).”という言葉です。これは、秋春両方の授業で先生が強調していたことでもあります。人間がコミュニケーションをとる場合、それは言葉を交換する前から既に始まっているということがポイントです。会話をするとき、私たちは相手や自分が発した言葉に注意を払い、相互に理解します。しかし、そもそものコミュニケーションのスタートは、相手と会った瞬間に得る認知、つまり相手の表情や雰囲気、人種、国籍、性別等から感じ、考えることで作られる「印象」です。とりわけ異文化間のコミュニケーションにおいては、この概念を知っておくことは重要だと思います。言葉を交わす前から認知をすることは自然であって、それが悪いことだとは思いません。しかし、過度に固定観念を持って相手と接することはマイナスだと思います。特に外国人と話すとき、相手が「外国人である」ということすら意識せずに話すことができれば、より心を開いたコミュニケーションがとれると信じています。この授業で学んだ言葉をこれからも忘れず、大切にしたいです。

日々の授業に加え、生活の重要な部分を担ったのは、アメリカ人学生とのハウスシェアです。私は、初めは寮で一人暮らしをしていましたが、秋学期の途中からアメリカ人、日本人と3人でシェアハウスに住みました。ハウスメイトのアメリカ人は日本語を勉強しているため、いつも互いに英語と日本語を教え合っていました。毎日一緒に食事をしたり、宿題をしたり、遊んだりして本当に楽しい時間を過ごすことができました。彼の実家にも何回も遊びに行かせてもらいました。彼は数ヶ月後に日本に来る予定なので、今度は私の家に泊めてあげて、周りの案内もできたらと思います。こうして時間を共有することでアメリカ人の親友ができたことはかけがえのないことです。留学する前にはまさかこんなにも深い関係の友達ができると思っていませんでしたので、本当に嬉しいです。心から信頼できる親友が国籍など関係なくできるということを、彼

が証明してくれたように感じます。

留学生活で特に自主的に大きな力を注いだのが、親善大使インタビュー企画です。親善大使として来たからには、埼玉県とオハイオ州のより深い関係の構築に貢献したいと考え、自らこの企画を立ち上げました。福井県からの親善大使と共に、フィンドレー大学長、前学長、フィンドレー市長にインタビューし、その結果をレポートにまとめました。主な対象を両県の高校生とし、三方に留学や異文化交流の意義、ご自身の若者時代や現在の仕事等を伺いました。これからを担う若い世代に、県の留学プログラムや留学そのものにもっと関心を持ってもらいたいと考えました。日本の高校生がフィンドレーのことを知って、また私たちの活動自体を見て、アメリカ、オハイオ州で留学することに興味を持ってもらえれば、県と州の親善につながると思います。インタビューをした三方とも留学の価値を認め、ますます異文化交流の輪を広げていくべきだという考えをお持ちでした。

フェル現学長の言葉が特に印象的です。異文化交流について次のように答えていただきました。「異文化交流により、ときに国籍や人種の違いがあるからこそ私たちは面白いと感じ、しかし同時に、同じ人間であるという共通性が『違い』を超えた友達として私たちを結び付けてくれるのです」(インタビューレポートより抜粋)。私自身も留学中、もちろん外国人との違いを感じることもありました。それと同じかそれ以上に、やはり皆同じ人間だと実感することが多かったです。さらに言えば、異なる文化や宗教に敬意を払ったうえで、「違い」を持った人々との交流を楽しめたら、本当に世界が広がると思います。「違い」をも楽しみ、異なる考え方や価値観に触れ、自分と照らし合わせることで世界観を広げられ、自分の成長につながるように感じます。この企画によって三方についてはもちろん、主に留学の意義についてさらに考えることができました。日本語でも誰かにインタビューを行ったことはなかったので非常に苦労しましたが、完成させることができ良かったです。是非、より多くの方々に読んでいただくことで「草の根親善大使」として少しでも県と州の親善に貢献できることを願います。

授業やシェアハウスでの生活、インタビュー企画等を通じ、本当に様々な人と多くの交流を持つことができました。これまで紹介してきたことに加え、様々なボランティアにも参加することでさらに交流の機会を得られました。アメリカ人の小学生に日本語や日本の歌等を教えるボランティア、フィンドレー大学の学生とパートナーを組んで行う地域ボランティア、また日本に留学するアメリカ人学生の支援を行いました。特に 3 番目の留学準備支援は私が中心となり

行いました。獣医学を専攻し、5月から6月にかけて北海道の大学に留学する5人に対して、日本語や日本文化を伝える活動をしました。長い滞在ではないことを念頭に置き、いかにスムーズに日本の生活に順応できるようにすることを重要視しました。海外経験が全くない、日本について何も知らない学生もいる中で試行錯誤しましたが、最後には皆日本語で自己紹介もできるようになりました。この活動を通じ大切な友達ができただけでなく、何より嬉しかったです。授業や様々な活動によって、留学生や幅広い年齢のアメリカ人と盛んな交流を持てたことは大きな財産だと感じています。英語という語学力だけではなく、広い意味でのコミュニケーション能力を向上させることができたと思います。帰国の直前にはオハイオ州知事への表敬訪問もあり、タイトなスケジュールの中、お話しさせていただく機会がありました。知事からの矢継ぎ早の質問に答えるのは非常に難しかったです、なんとか任を果たせたと感じています。留学の締め括りにふさわしい貴重な経験でした。

これまで述べてきた様々な経験を通じて、冒頭で触れた、「心身ともにタフで、豊かな世界観を持った人」に少しは近づけたと思います。正直、膨大な課題やその他の活動に追われ非常に大変なこともありました。しかし友人との励まし合いや時間の使い方の効率化等によって乗り切ることができました。今思うとその大変さも留学の楽しみの一つだったと感じます。国籍や人種の異なる様々な人に触れ、世界観も広がったように思います。以前にも増して外国やそこに暮らす人々に強い興味を抱くようになりました。また世界に様々な文化や人が存在し、その全てが尊重されるべき美しいものだと感じるようにもなりました。例えば世界には、他者を無差別に巻き込み、悪影響を与える過激な考え方を持った人々や集団も存在します。彼らを肯定する気は全くありませんが、こうした場合においてさえ、ではなぜ彼らは「違う」のか、分かり合える部分はないのかということにも目を向ける必要があると思います。こうした姿勢が他者への尊重、延いては世界の平和につながるからです。人はそれぞれ生まれた場所や育った環境、周囲の人々、金銭的な豊かさ等に違いを持っています。それ故、当然一人として同じ人はいません。他者との違いを理解できない、煩わしいものと片付けてしまうのはもったいないように感じます。違いがあるのは自然であって、ではどんなことを共有できるのか、またその違いから気付いたり、学ぶことはないのかと考える方がよほどポジティブで、世界が楽しくなると思います。他者を尊重し理解しようとする姿勢はこれからも絶対に忘れません。将来、日常生活、あるいは仕事等で外国人と話す機会もあると思います。そうしたときにこの留学で得た経験が必ず生きる信じたいと思います。

また、留学中、挑戦をすることが非常に多かったように思います。初めの頃

は単に誰かと英語で話すのも、授業を受けるのも私にとっては大きな挑戦でした。ボランティアやインタビュー企画、州知事への表敬訪問等も、十分な準備や心構えが必要な大きな挑戦でした。留学を終えてこんなにもたくさんの挑戦の機会をいただけたことに本当に感謝したいです。もともと何かに挑戦することにしり込みをしてしまいがちな私でしたが、留学を経て、チャレンジ精神の重要性を痛感しました。今後も積極的に挑戦していきたいと思います。最後に、改めて、私が得たこの貴重な留学の実現に尽力していただいた全ての方々に感謝します。今後もこの留学プログラムが継続され、埼玉県とオハイオ州がより深い関係を構築できることを願います。



図 1 : 校舎 (オールド・メイン)



図 2 : Intercultural Communication の先生と学生



図 3 : フェル現学長へのインタビュー



図 4 : 高校生、フィンドレー大学の留学生によるディスカッションのメンバー